日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）**22**(2)：281, 2013.
第23回日本小児整形外科学会学術集会　パネルディスカッション　2

思春期股関節障害の診断と治療

座長：杉　山　　肇・金　　郁　喆

この度，岩本会長の企画であるパネルディカッション「思春期股関節障害の診断と治療」の座長を杉山肇先生と担当させていただいた．演題は5題で初めに「股関節鏡による診断と治療」と題して杉山肇先生にその有用性ついて発表していただいた．滑膜炎や関節唇損傷およびFAIの診断だけでなく，鏡視下手術による関節唇の修復や切除にも有用で，今後も普及すべき治療法であると確信した．2題目は「思春期DDHの関節内所見と寛骨臼移動術の成績」と題して，中島康晴先生にDDH後の前期股関節症および初期股関節症例の関節鏡視下所見を報告していただいた．72%の症例で臼蓋側の軟骨変性があり，33%に骨頭側の軟骨変性，関節唇損傷は初期股関節症では全例に認められたとの報告で，DDHにおける臼蓋側の被覆や適合性の重要性を示唆した．3題目は「大腿骨頭すべり症後の大腿骨頭壊死症に対する対応」と題して北野利夫先生に発表していただいた．徒手整復後の発症60%と多数を占めており，年長児発症のため成人の大腿骨頭壊死症に準じた治療が必要であるとの報告であった．4題目は「思春期重度大腿骨頭壊死に対する大腿骨頭後方回転骨切り術―2～18年の経過例の検討―」で渥美敬先生が発表された．骨頭全域の壊死症が多数あったが，後方回転骨切り術では良好な修復が得られると報告し，若年者の骨頭壊死に対する手術法のひとつに挙げられる．最後は「化膿性股関節炎後骨頭消失型関節症に対するイリザロフヒップ法の臨床経過―術後9年および13年経過例の報告」と題して，中瀬尚長先生に報告していただいた．下肢長差，アライメントの同時補正が可能な手術方法で，小児期発症の骨頭消失に対する有用な手術法のひとつである．

思春期股関節障害の診断と治療法について，以上5名の第一線で活躍されている先生方とのパネルディスカッションを持てたことは，本パネルディスカッションに参加された先生方の今後の臨床に大いに有益であった．ご発表いただいた先生方に深謝する．

（文責：金　郁喆）